

おわりに

「子どもに生きる・子どもと創る！」

子どもを健やかに育む子ども学を基盤とした保育者育成とは?!」

昨今、日本の自然環境・社会環境の変遷状況を顧みる時、表面上は平静を保っているが、目前に起きている中小の変化を辿り、その先に予想もつかないような劇的大変革が待っているように思えてならない。こうした思いを抱くのは、私一人のことであろうか？ 今回の『子ども学総論』の執筆・出版は、こうした危機的な内容も含むたいへん重要なエポックを迎える現在、日本の子ども一人ひとりを健やかに育むことなしに、日本の平和や輝かしい未来は決してやっとなしといた切実な思いに突き動かされてのことである。

世界の環境問題に警鐘を鳴らしたレイチェル・カーソンは、その著「センス・オブ・ワンダー」で、子どもたちの健やかな成長・発達に必要な事柄を二つ挙げている。一つ目は、本のタイトルそのものである「センス・オブ・ワンダー」すなわち、幼き日に身近な自然と十二分に喜びをもって関わりつつ、確実に「神秘さや不思議さに目を見張る感性」を身につけること。二つ目は、「身近なところに、常に寄り添い共感してくれる大人が一人いること」。家庭では保護者の方々、園では担任の保育者との関わりといったことになる。これら二つの事柄が幼い重要な時期に確保され、適切に日常生活で実施されることにより、子ども一人ひとりとは心身ともに健やかに育まれるといったことなのである。時代がいかに劇的に変遷しようとも、これら二つの事柄は、とても重要なことと考える。知ることや学ぶことではなく、身近な環境と十二分に関わり、生きるなかで感じること、「生きる喜びを実感する」ことの重要性なのである。

『子ども学総論』執筆に関わるスタッフ一同は、こうしたレイチェル・カーソンの考えに基づきつつ、以下のような点が子どもを健やかに育める子ども学を基盤とした保育者の資質と考えている。

健常児も支援を要する子も、一人ひとりの子どもの可能性を広げられる 保育者を目指して…

1. 乳幼児の健全な育ちを支援できる実践力

胎児・乳児・幼児・学童といった育ちの流れをもって、幼い子どもたちは健やかに育まれる。健常児も支援を要する子も、すべての子どもの成育の流れを理解しつつ、よりの確な関わりを臨機応変的に対応できる保育の実践力が是非とも必要である。

2. 常に質の高い保育を提供できる探求力

保育実践を裏打ちする学問を基盤とした実証的探求力は必須である。研究なきところに、充実した教育は存在しない。また、保育実践を自身で振り返り評価できうるといった、恒常的に質の高さを目指す、飽くなき向上心も欲しいものである。

3. あらゆる子どもたちに対応できる協働力

健常児だけではなく、ハンディを有した子どもやボーダーの子どもなど、あらゆる子どもたちに対応するために、自身の人間性や知識・技術、さらに協働による仲間の力を活用し、質の高さを実現できうる実践力を有した人材が必要である。

4. 自主自律に基づく判断力と行動力

保育には、臨機応変に適切に対応できる実践能力が要請される。ここでは、保育者一人ひとりの自主自律に基づく、的確な判断力と大胆で繊細な行動力が求められるのである。

5. グローバルな視点に立ち活躍できる行動力

園に通うのは、日本の子どもだけではない。欧米・アジア・アフリカ・イスラムなど世界のさまざまな文化や言葉の違う子どもたちが園に通ってくる。こうした多文化を的確に受け止め、日常生活をともにできる保育者が必要である。

こうした5つの資質、すべてを良好に身に付けることは、たいへん難しいことである。しかし、学ぶために工夫し身に付けやすく充実したカリキュラムや施設設備、そして何よりも情熱と実力のある教師集団を最大限に活用しつつ、

各自の置かれた場に則し、的確なアドバイスに基づく、地道な努力により、一つひとつの資質向上を着実に図かり、身に付けてゆくことは可能であると考え
る。

私は、常に思う。ピンチはチャンス！と、時代が厳しければ厳しいほど、真実が求められる。本物しか、本当の教育や保育しか存続しえないのである。この『子ども学総論』の執筆が、日本の子どもたちの健やかな育ちに微力ながら貢献させていただけることに限りない誇りと溢れる感謝の念を禁じ得ない。今後とも、読者諸氏の温かくも厳しいご指導ご鞭撻を心よりお願い申し上げ、本書の「おわりに」とさせていただきます。

大澤 力